

シュリー・オーロビンドに及ぼしたラーマクリシュ ナとヴィヴェーカーナンダの影響

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2013-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 泰司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/14815

シュリー・オーロピンドに及ぼした ラーマクリシュナと ヴィヴェーカーナンダの影響

山 口 泰 司

はじめに

去る2010年5月30日(日)に清泉女子大学講堂にて、「調和と平和」と題する、「日本ヴェーダーンタ協会創立50周年記念祝賀行事開会式並びに第148回スワミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕記念日祝賀会」が、日本ヴェーダーンタ協会祝賀行事組織委員会および清泉女子大学地球市民学科共催で、挙行された。

以下は、私が当記念祝賀会に招かれて行った記念講演の内容を、一部補筆して再現したものである。

記念祝賀会講演

まず始めに、本日、「日本ヴェーダーンタ協会」創立50周年祝賀会の場に、一言ご挨拶申し上げるようお招きいただきましたことに、心より感謝申し上げます。

私は西洋哲学を専攻して、広く哲学的人間学の立場から、人間の本质を能うかぎり多様な視角に立ってトータルに理解したいと、若いころより悪戦

苦闘してまいりましたが、これと言った成果もあげられずに、ひとり我をあれんで参りました。

そのような者が、いつしかインド哲学に惹かれるようになって、とうとう昨年は、近代インド思想の金字塔とも唱われる、シュリー・オーロビンドの著『The Life Devine, 神の生命 — 霊的進化の哲学』の翻訳を出版するまでになってしまいました。本日お招きにあずかりました理由も、おそらくはそこにあるものと思われます。

そこでまず、私が西洋哲学を専攻しながらも何故インド思想に引かれるようになったのか、そのわけを少しくお話ししてみたいと存じます。

ご存知の通り、西洋では科学に代表されるように、学問は分析的理性と感覚による確証とを真理の最高法廷と考えます。つまり頭でも考えられず体でも確かめられないようなものは、存在しないも同然と考えるわけです。ところが哲学は、本来、一体この自分は何ものなのか、はたして自分はどこから来てどこに行こうとしているのか、またこの世を超えたところには何が広がっているのか、意識をかぎりなく深く掘り下げていったらどこに行き着き、意識をかぎりなく高く昇っていったらどこに到るのか、といった謎めいた問いに、真正面から取り組むはずの学問です。そのようななかで人間をトータルに捉えようとすれば、どうしても無理が生ずるのは当然です。人間を理性と感覚の枠のなかに閉じこめて、その範囲のなかで決着をつけようとすれば、とかく、胸の憶いとか、魂のねがいとか、生命の輝きとか、幽玄な情趣といったものは、ことごとく切り捨てられるしかないからです。それでもめげずに、私は、実存哲学や精神病理学をはじめ、芸術学はもとより、動物行動学や進化生物学などにまで手を出して、人間の全貌を学問として捉えようとしたのですが、「魂の世話」というソクラテスのキャッチフレーズには一歩も近づけないという無力感は、どうすることもできませんでした。

しかし私のこの無力感は、17世紀以来西洋の近代哲学そのものが抱きつづけてきた無力感だと言ってもいいのです。17世紀18世紀の哲学は理性を

人間の最高の能力と考えて、理想主義の立場から人間を限りなく高邁なものとして捉えようとしたのですが、19世紀の産業社会になると、ひ弱な理想主義に代わって、新たに物質的現実立脚した感覚的世界が真理の法廷とされて、いっそう力強い現実主義の人間観が押し出されるようになっていきます。ところが19世紀も半ばを過ぎて近代社会の矛盾が様々なかたちで顕かになりはじめると、人々は大きな社会不安の中かで、人間が無意識のうちにかかえている、ただの理性でもただの感性でも解決することができないような根本不安に次第に深く目覚めるようになっていきます。やがて、頭よりもからだよりももっと深いところに人間を解く鍵が潜んでいるのではないのかという思いが、実存哲学となって結実し、意識よりもっと深い無意識にこそ問題解決の糸口は隠されているのではないのかという思いが、精神病理学などを誕生させ、20世紀になると、ほとんどすべての人文科学は、それぞれの分野で無意識的世界の構造を探ろうと一斉に走り出したと言ってもよいほどです。

そのようななかで現代の西洋哲学はせっかく〈実存〉といった観念や〈無意識〉といった観念を探り当てながらも、それらが〈生命〉に、それも宇宙的生命に根を張るものであり、それらが〈魂〉に、それも神の魂に発するものであることを認めようとしないうちに、理性の無力と感性の頼りなさを徒に嘆くばかりで、ついに人間のかかえる根本問題を解くことができずにいるのです。この無力感をきわめて垢抜けした仕方では華麗に表現したのが、ポストモダンといわれる一群の現代思想です。この思想は「近代の死」を宣言し、ヨーロッパ中心主義、理性中心主義を告発して、人間的視点の無限の多様性と真理の相対性を説く、きわめて真摯な哲学ではあるのですが、無常の法と無我の法は説いても、靈魂の不滅や神の存在はもとより、八正道さえ説くことがないため、ついに希望の哲学となることができないでいるのです。

私がこのようなかで西洋哲学の限界と自分の無力感を克服しようと、若いころより純粋に個人的なレベルで憧れつづけてきたのが、澄み切った水

のような境地で静かに道を説かれる釈尊の人格と、虐げられた者たちへの燃えるような憶いで火を噴くような教えを説かれるキリスト・イエスの人格とでしたが、その後たまたま手にした書物から偶然に知ったのが、神に酔える宗教的天才、ラーマクリシュナの蜜のように甘く、朝露のように爽やかな人格でした。こうした偉大な人たちを身近に感じながら、芸術に、それもとりわけ東西の宗教音楽に慰めを見出すというのが、無力感克服のせめてもの私の道でしたが、やはり学問上の無力感はいかんともしがたく、私は、意識の神秘と生命の神秘を科学的進化論の視点から扱ったダニエル・デネットの二つの大著の研究と紹介をすませたあと、いよいよインドのヴェーダーンタ哲学の伝統を踏まえて生命の霊的進化の哲学を説いたシュリー・オーロビンドの大著に取り組むことにしたのです。オーロビンドの『神の生命』は若いころ宮沢賢治研究家の親友と二人で読み始めていたのですが、西洋流の合理思想しか知らない自分からしたら、発想があまりにも奇抜でその独特の言葉遣いもひどく難解に思われたため、ついに棚上げにできてしまっていたのです。ところが私は、これを理解し、これを紹介しないかぎり自分の哲学研究は永遠に中途半端なものに終わってしまうという強迫観念じみた憶いを次第に禁じることができなくなっていたため、西洋哲学と理性からの呪縛のなかですっかり重くなってしまっていた腰を上げてやっと本格的に研究し始めてみると、何故か今度は、読むもの読むもの一字一句が、自分が書きたいと思うとおりに書かれ、自分が言いたいと思うとおりに言われていることが分かり、私は学問の歓びを心の底からやっと味わうことができるようになったのでした。

ところで、シュリー・オーロビンドと言っても、日本ではご存知ない方がほとんどではないかと思われますので、ここで少しく彼について紹介させていただきますと、オーロビンドは、1872年に、イギリス帰りの医者の子としてカルカッタに生まれたのですが、父親が大のイギリスびいきで、何としても息子をイギリスによるインド統治の高等文官試験にパスさせたいという思いから、早くも7歳になったばかりのオーロビンドを、二人の兄たちと

一緒にイギリスに送りこんでしまうのです。幸いオーロピンドは、持ち前の抜群の探究心と理解力とによって、イギリスでの厳しい試練に耐えて名門セント・ポール校からケンブリッジ大学へと順調に進んで、古典学では首席の成績で大学を終了するのですが、すでに揺るぎないものとなっていたインド独立革命への憶いから、インド統治の高等文官試験だけはあえてボイコットして、帰国後はバローダ藩王国の政務官として働くかわら、ひそかに革命運動を準備していたのです。しかしながら時到达了と見るや、当時の政治運動のメッカ、カルカッタに赴いて、政治・ジャーナリズムの世界で急進派のリーダーとしてたちまちにして頭角をあらわすのですが、その間に起こった要人暗殺未遂のテロ事件の黒幕と見なされて一年間の投獄を余儀なくされてしまいます。しかし獄中では、帰国後すでに始めていたヴェーダーンタ哲学の研究とバガヴァッド・ギーターの研究など、本格的なインド研究とヨーガの修練を一年間集中して行うことで、普通では考えられないほど高い霊的境地に達して、革命家から宗教家への転身の準備が期せずしてとげられていたのです。そのため、一年後に無罪放免の身となったときには、今度こそは何としてもインドの英雄に死罪をと待ち構えていたイギリス官憲の手を逃れるべく、仏領首都ポンディシェリーに亡命して、そこで哲人宗教家としての道を歩み始めることになりました。彼は生涯この地にとどまって、ヨーガ、それもとりわけ瞑想の実修体験をベースに、人類の実態と可能性をめぐる一連の膨大な著作活動을続けながら、後進の指導に当たりました。政治への関心は生涯失われることはありませんでしたが、イギリスからのインドの解放というテーマに代わって、無知からの人類の解放と、霊的進化による人類の統一という理想が、新たな目標となったのです。

さて、オーロピンドの思想を紹介する前に、その思想と哲学的生涯を理解するための決定的な鍵となるオーロピンド自身の言葉を二つ、紹介させて下さい。

「…ところが監獄には、『ギター』と『ウパニシャッド』を携えていったので、私は『ギター』のヨーガを実修し、『ウパニシャッド』を頼りに瞑想をしたのです。…疑問や難しい問題が生ずると、光を求めて、時折『ギター』を開いてみたのですが、そこからは助けや答えが返って来るのが普通でした。…監獄では、一人で瞑想をしていると、2週間にわたって、ヴィヴェーカーナンダの声が絶えず私に語りかけていたので、私は嘘偽りなく彼の存在をありありと身近に感じていたのです。…その声が語りかけてくるのは、靈的経験の、きわめて重要な限られた特殊な分野でのことでしかなく、そのテーマについて言うべきことを言い終わると、その声はぴたりと止まってしまうのでした。」(「Sri Aurobindo on Himself」より)

つまりは、今は亡きヴィヴェーカーナンダの魂が、まさにこれぞというヨーガの要諦を、2週間にわたって、直々につききりで指導してくれたのだ、というわけです。

1912年12月5日の日記 (「Record of Yoga」より)

…10月18日に…シュリー・ラーマクリシュナより3回目の、そして最後のメッセージが届いた。最初のメッセージはバローダで届いたもので、「オーロビンドよ、寺院を建てなさい、寺院を建てなさい」というものと、蛇のプラヴリッティ the snake Pravritti が自分をむさぼり食っている寓話とであった。次のメッセージが与えられたのは、ポンディシェリーに到着してすぐ、シャンケル・チェティ Shanker Chetti の家でのことであったが、そのときの言葉は失われてしまったが、より低い自己のうちにより高い「自己」を形成せよといった内容のものであり、それは、サーダナーが終りに近づいた頃、もう一度語りかけるという約束を

伴うものであった。そして以下に記すのが、3番目のメッセージである。
(1912年10月18日)

「カルマの完璧なサンニヤーサになりなさい。

思考の完璧なサンニヤーサになりなさい。

憶い（感情）の完璧なサンニヤーサになりなさい。

これが、私の最後のメッセージです。」

つまりは、これまた今は亡きラーマクリシュナからの最初のメッセージは、この世に物理的な寺院を建てるのではなく、あくまでも、我が身をもって内なる神を祀る社（やしろ）とせよ、というものであり、次のメッセージは、この身を厭って徒らに超越的世界に憧れるのではなく、あくまでも、この世、この身のうちに、至高の自己を成就せよ、というものであり、そして最後のメッセージは、カルマ・ヨーガ、ジュニャーナ・ヨーガ、バクティ・ヨーガのいずれにも片寄ることなく、どこまでも、全てのヨーガを一つにした全一的統合のヨーガをこそ、我がヨーガとしなさい、というものであったのです。

以上でおわかりのように、何と、シュリー・ラーマクリシュナこそがオーロビンドの影のスーパーヴァイザーであり、ヴィヴェーカーナンダこそがオーロビンドの影のチューターであったのです。

オーロビンドによれば、永遠の实在でもあり、永遠の意識でもあり、永遠の至福でもある絶対者ブラフマンは、その全き自由意志にもとづいて、インヴォリューションという退縮のプロセスを繰り返すことで天地万物を形成し、みずから無限に多様な物質的現実となってこの世にくだるのです。

生命も意識も欠いた、ただの死せる物質的現実と見えるもののうちにも、

ブラフマンの永遠の實在と意識と至福とがそっくり姿なきままに息づいているため、やがて時が到ると、死せる物質のうちから生命が目覚め、盲目的生命のうちから意識が目覚め、おぼろな意識のうちから精神が目覚めてくるのです。インヴォリューションのプロセスによって形成された天地万物が、エヴォリューションという進化のプロセスによって順次より高い世界に目覚めながら、有限で東の間の世界を除々に脱して、もと来た絶対者ブラフマンの世界に近づいていくのだということです。だとしたら、精神に目覚めた人類が、すでに精神のうちに息づいている超精神 supermind や超理性 superreason に目覚めて、さらに超人類への脱皮の道を辿り始めないはずはなく、古代インドのリシたちや、天使・菩薩などに象徴されるような、慈悲と智慧の権化と化した存在にまで高まれないはずはないではないか、ということです。

このようなオーロピンドの主張を象徴するのが、「遍在する、聖なるまことの現実」という言葉であり、「インヴォリューションとエヴォリューションの循環」という言葉であり、「神の生命」という言葉であり、「全一的統合」という言葉なのです。

このように、存在する一切がまさに神の生命を宿した聖なる現実だとすれば、私たちのからだやこの世の現実はもとより、臆たけた理性によるいかなる二分法の片割れも、切り捨てられるべきものは一つとしてなく、存在する一切が、本来の聖なる世界への脱皮をとげようとしている、なくてはならない仲間ではないか、というわけです。しかしこうしたすべての主張も、神の魂こそが我らが魂であり、神の生命こそが我らが生命なのだとする、ヴェーダーンタ哲学の本髄に発するものであることは、言うまでもありません。最後に、オーロピンドの1100頁にも及ぶ大著『神の生命』も、ある意味では、彼の事実上のチューター、ヴィヴェーカーナンダの、「人間の本性」と題するわずかな数頁分のロンドン講演の、綿密無類な注解の書なのだとすることを申し上げて、本日のお祝いの言葉とさせていただきます。